



中将姫一代記

二

^ 13
3294
2



18
3294
2

中將姫一代記卷之二

豊成卿後妻を遣くむ事

禁裏管絃之事

姫君の時父上ひめぎみにときちちうへびくひのゆき吾わが幼こころして母上ははちちよそをおと御ご貌も

もさもごごああのの覺おぼええのの御ご懷なごみみ思おもひひなるなるをを願ねがひひ父上ちちうへよよももささび

母公ははきみとと近ひくくむむくく一ひと吾わが實まことのの母上ははちちととありありひひ事こと一ひとももくくんんととおおととははに

くく中なかつののひひををとと豊成卿とよなりもも志こころざしををああんんどど思おもひひなながが御ご沙汰さたをを

かかららりりししううババ時ときとと窺うかがひひ折おみみすすそそとと御ご勸すすめめりりををれれをを豊成とよなりに

も止と事こととと得えざざとと攝たか堵の房ふさ卿の御ご息いき女むすめ照てる夜よ前まへとと娶めとりりままよよふ

豊成卿とよなり照てる夜よ前まへとと對たいしてしてののむむささるる吾わが一ひと人ひとのの女むすめありあり終はつくく方かた

口尋くち臣しん一ひと代だい記き卷まき之の二に

大正十年八月廿九日
本大學出版部

て給さうと照夜聞のひ俄に姫の御事ハ産しふよりも從最愛
 御事とありをれが豊成卿悦び少の妹背れ御事あり
 ざりたるあり衣姫君の愛中に貴妃菩薩あり少の汝前生の
 宿縁ありて今般後母ありと汝に對して過去の悪因
 縁の結ひあり者なきと後年ハ大なる災難に値し汝は
 多と敬之深に害とまぬぐるを得て吾ハ汝の母なりと
 たらまち西の空小入の衣抱を留んとし中より孝を悟り
 志すも姫君其奉をよもやなむと農昏孝養と盡し
 あり小入王四十六代孝謙天王天平勝寶六年三月三日女帝
 乃御事なきと花の節會に孝をせし三公撰家の御事

と集りて宴會し玉の豊成卿の御方より照夜承珠
 中将姫と幼少をよそそ御事管絃も暗くさうと
 かしとちり寄りの其外諸卿大臣は水の方家もくと
 参り金殿玉樓に御前小昇殿に並居り折節を
 乃花盛り櫻梅桃李の色と手ハ錦繡綾羅に袂を
 列ね各綺羅と盡し花やうを舞ひもを振りあつて節
 會なり天白紫宸殿に生御ありて歡感深めんと
 即挑花に御酒をありをよそそ音ありて萬歳と祝し
 ありたる至上歡慮斜かむん詔し言く今日ハ希有の
 宴會いざや管絃と停し太平樂とて國土安全の

出瑞と移んと勅令のあつてはよろしく内侍の司をもく
 下知とありし琴瑟琵琶箏箏鼓羯鼓蕭公畢業
 などあまの楽器と務りあつて上より詔さく中
 将姫ハ琴の役思ふあハ蕭の役其外人の皆を以て
 作序さると衣紋を剛絲竹れ個とらぐたり云々
 名家ハ簾中各家ハ秘曲を奏する事かると天子
 も玉冠を傾く歡聞ある中も中将姫ハ今年八歳の
 稚子大段たがう後とらう守らるもなく琴ひき寄く強
 一玉ハ音氣高きをこれ妙なる事いふらん也とあり
 上深感トあり今日ハ音楽の長たるべしと御褒美あり

園りむつとく照夜前ハ蕭の役よとて蕭笛乃れ
 習ひ熟せざれば吹けぬものあり然るも思ふ衣前
 おひかなめや持者答感しむよを見たり六外乃女
 依りく首尾よく調へども君乃思存も慚くは時あり
 参合よめる不覺を取らる事吾身の耻其家の耻
 之むりなり實や若らるる勝るを妬せし習ひあね
 照夜前家乃れおかなをとりくよとてさうより終
 姫君と懐と初野をさうなかりし事とて照夜前
 冬の夜より懐妊ハ公地よりせし事今親中秋安く平
 里より始り男子のくまを豊成御師歡悦はせ

即豊壽丸と名けぬは継母ははらとありしは姫君と名

つりしはあひたる姫君は八洲舟を儲らし心候りと偏し

清由龍皇あまなりなりなるる御世御代言中將姫九葉よなり

若あひたるありしは父上よむいひのむく我七母の御世御

の御世御代言を續と思ふ願あり父上の御世御代言と崇り奉

た傍を傳傳しお傍りたり傳る如何清座さんやとあり

くるとる豊成御感し思ふ即言傍を傳し姫君の御世御

傍を傳しせむいひたりとる傳傍たは感念しぬく知事か心

清志奇特なるか氣御教えのありしは攝津清土傳しよと

ハかうしとるあん傳し傳しんとありしとる姫君言ふは世に

母徳ありし園の月を縁傳るくんくありしは化傳し御世御代

傳しとるを吾初し續と能は袋よととる朝の頂戴

とるのり則は御世御代言と見せむと是七祿齋

清土傳あり老傍不思議の思ひをありおし思儀

なるか氣御教えも化傳の授らるも同く一經あり

だけ御世御代言宿縁あり経あり跡は思ひありあり

と存んころは清しとる姫君たは歡びあひ女日六卷の

御世御代言漏忘りし事あり或日偶女上の御墓所

偏しとるいしがあはる野邊の氣をを見え清土傳の

餘り

餘り

山下藤内

中野娘

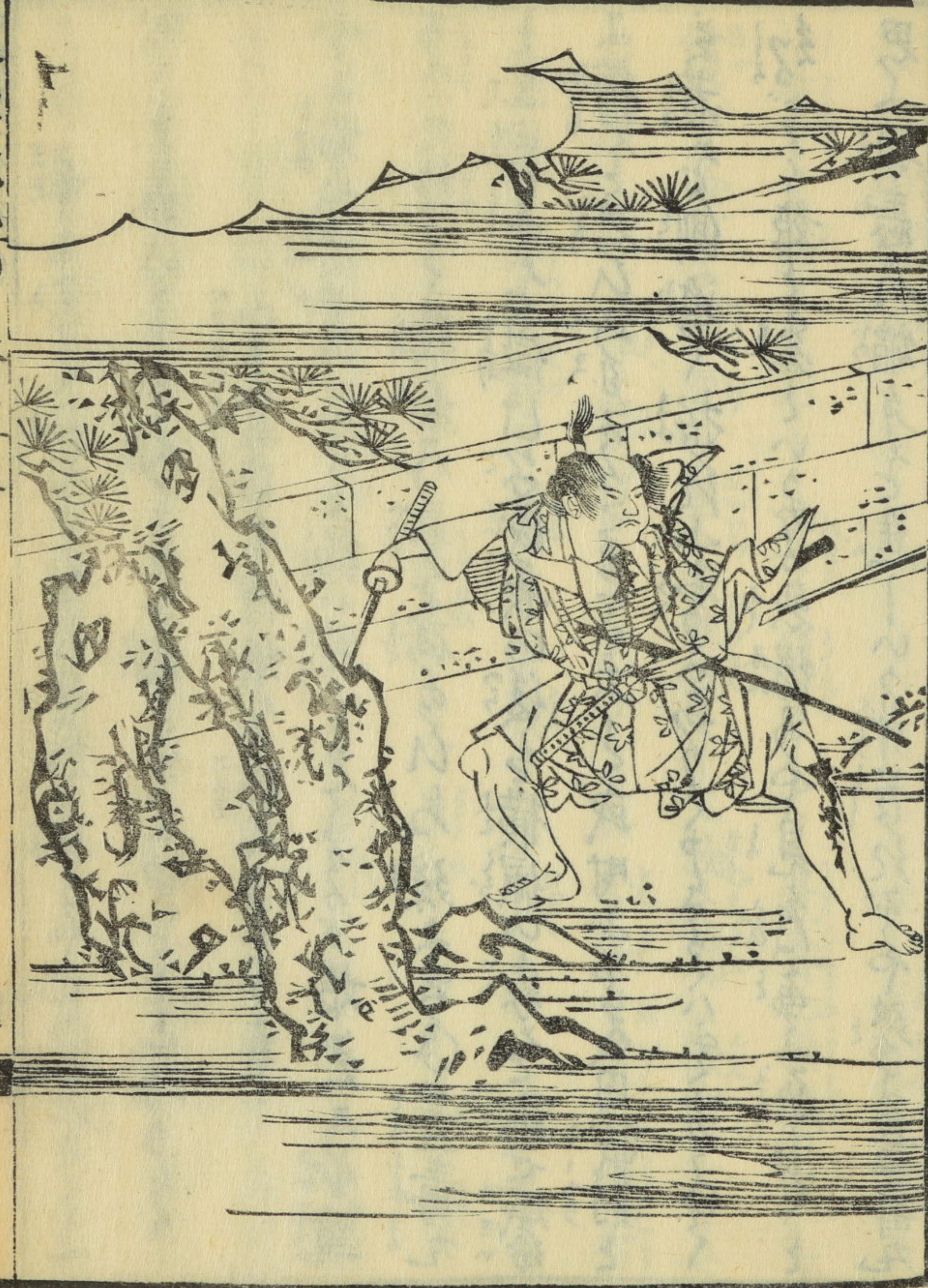
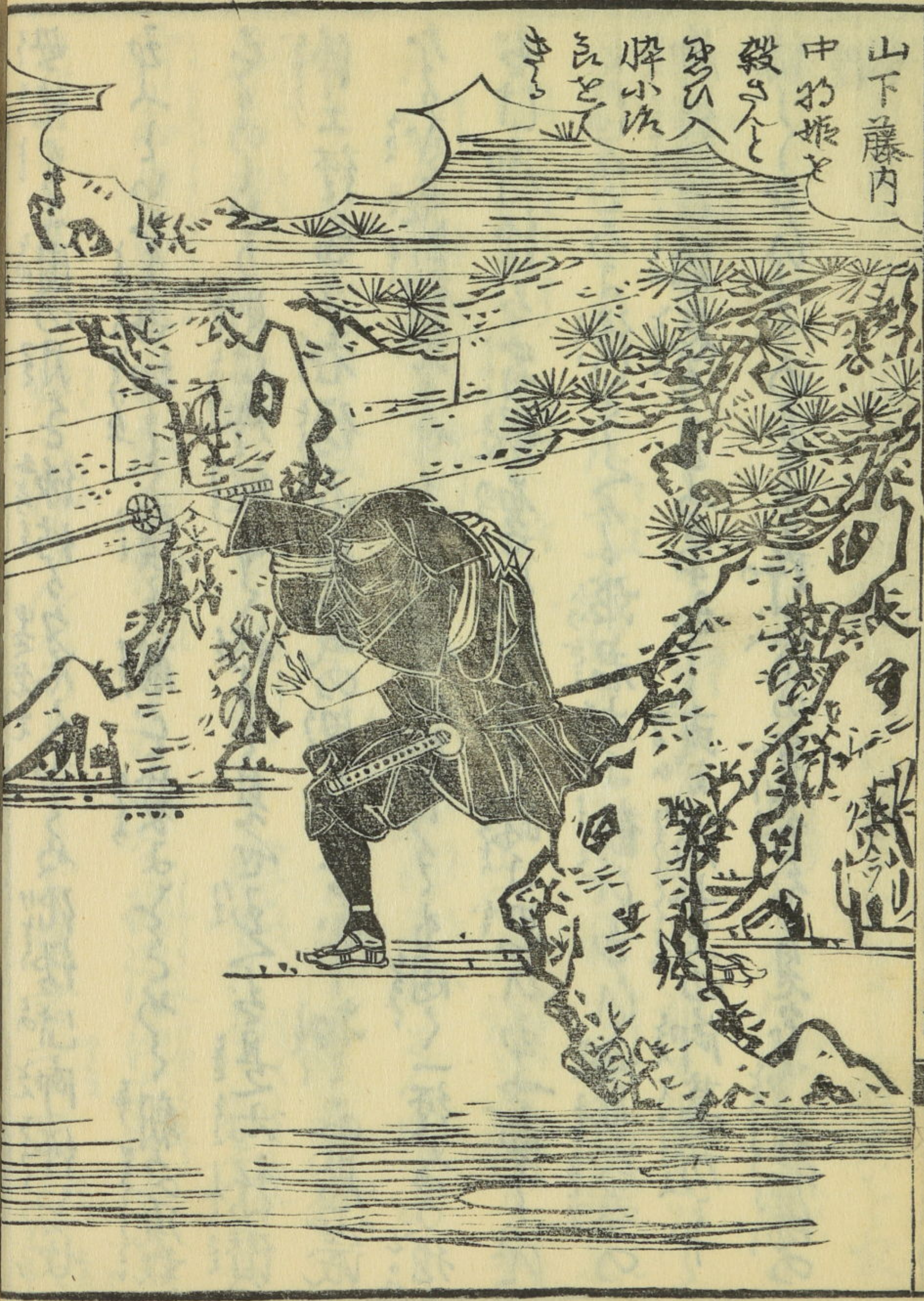
殺す

身入

倅小次

長と

き



希^まの^まあ^まく^ま同^まも^まま^まび^まれた^まね^ま風^まと^ま常^まや^ま岩^まの^ま下^まに^まく^まと^まか^まく^まむ^まひ^まる^まる^まぞ^まく^ま是^まと^ま圃^まく^まや^ま又^ま袖^まと^まを^まな^まり^まる^ま

山下^{やまもと}後^ご内^{うち}中^{ちゆう}將^{しやう}姫^{ひめ}を^を殺^{ころ}んと^とす^する^る事^{こと}

今^{いま}は^は始^{はじめ}に^に後^ご母^ぼの^の後^ごと^と物^{もの}ハ^ハ膝^{ひざ}く^くか^かく^くる^るが^が姫^{ひめ}老^{らう}乃^の也^{なり}頭^{あたま}多^たく^くは^は信^{しん}々^々と^と腹^{はら}患^{あは}れ^れ乃^の刃^{やいば}を^を砥^{とぎ}の^のひ^ひぬ^ぬ殊^{こと}よ^よま^ま直^{ただ}豊^{とよ}壽^{じゆう}丸^{まる}と^と云^い男^{おとこ}が^が子^こを^を信^{しん}け^け子^こ成^{せい}長^{ちやう}の^の後^ごを^を横^{よこ}佩^{はい}の^の家^けを^を嗣^{ついで}せ^せ威^い冷^{れい}又^{また}信^{しん}々^々と思^{おも}ひ^ひ巧^{たくま}自^じら^らる^るこ^こと^とす^する^るこ^こと^とす^する^る或^{ある}時^{とき}山^{やま}下^{もと}後^ご内^{うち}載^{のり}則^{すなは}と^とえ^え者^{もの}を^を側^{そば}近^{ちか}く^く指^さし^し小^こ齋^{さい}あり^{あり}又^{また}あり^{あり}く^くや^やら^らる^るハ^ハそ^そ方^{かた}々^々と^と知^しる^ると^とく^く姫^{ひめ}と^と家^けとい^いふ^ふなる^{なる}悪^{あく}縁^縁め^めや^や見^み度^ど毎^{まい}又^{また}急^{いそ}しく^くと^と思^{おも}ひ^ひ腹^{はら}患^{あは}れ^れ乃^の焦^{こが}れ^れと^と焦^{こが}れ^れい^いふ^ふ斗^と苦^くれ^れぞ^ぞや^や殊^{こと}よ^よ直^{ただ}豊^{とよ}壽^{じゆう}丸^{まる}家^け督^{とく}相^{さう}續^{じく}の^の障^{さう}と^とあ^ある^るハ^ハ姫^{ひめ}か^かと^とバ^バ何^{なに}と^とを^を汝^に今^{いま}宵^よ患^{あは}れ^れ入^いは^はる^る仕^し業^{ぎやう}とも^も知^しれ^れぬ^ぬや^やら^らる^る容^{ゆる}は^は殺^{ころ}害^{がい}して^{して}よ^よ豊^{とよ}壽^{じゆう}丸^{まる}横^{よこ}佩^{はい}の^の家^けを^を續^{つづ}ぐ^ぐは^は汝^にが^が子^この^の則^{すなは}重^{ちゆう}と^と第^{だい}一^{いつ}の^の執^{しやく}權^{けん}と^とて^て汝^に又^{また}婦^ふは^は歡^{かん}樂^{らく}と^とか^かと^とこ^こと^とあ^あり^りけ^けと^と偏^{へん}は^は頼^{たの}む^むが^がり^りと^とあ^あり^りと^とバ^バ貪^{えん}欲^{よく}せ^せ道^{どう}乃^の藤^{とう}内^{うち}守^{まも}り^りと^とい^いふ^ふ少^{せう}點^{てん}頭^{とう}を^を幼^{せう}と^と姫^{ひめ}を^を殺^{ころ}さんと^と鼠^{ねず}を^を殺^{ころ}す^すり^り易^{やす}と^とこ^こ必^{かなら}ず^ず心^{こころ}易^{やす}う^うと^とあ^ある^るぐ^ぐと^と信^{しん}合^がさ^さる^るハ^ハ用^{もち}を^をと^と申^{まを}す^すと^と申^{まを}す^すと^と度^どと^と六^む後^ご母^ぼか^から^らる^るこ^こび^びと^とあ^あり^り引^ひか^かす^すもの^{もの}と^とや^やら^らる^る載^{のり}則^{すなは}ハ^ハ家^け々^々と^とり^り子^こ則^{すなは}重^{ちゆう}と^と信^{しん}は^は指^さく^くや^やら^らる^る今^{いま}日^{にち}事^{こと}を^を神^{かみ}臺^{たい}の^の所^{ところ}へ^へく^く召^{まを}す^すと^と大^{だい}事^じと^と神^{かみ}臺^{たい}あり^{あり}其^{その}趣^{すゑ}ハ^ハあ^あら^らる^るれ^れ事^{こと}な^なり^りと^とあ^あり^りと^と汝^に牙^がを^を落^おす^す今^{いま}夜^よ姫^{ひめ}君^{きみ}を^を殺^{ころ}す^する^る事^{こと}な^なり^りと^とい^いふ^ふ小^こ治^ぢ良^{らう}則^{すなは}重^{ちゆう}ハ^ハ當^{あた}年^{ねん}十^{じゅう}八^{はち}歳^{さい}若^{わか}く^くな^なる^る

其其心腹めして非道よらざる者ものふははらぐ父の怨と
 泳めりたるいさち父の御心めたる天魔が入替るや主君
 の姫君を殺しちり首尾よくはせしを何ぞと云ふも
 幾行もあつた世の中は現世も天界も夢り世もなを殺し
 らしと未末ハ地獄もな若くはけんと掌とて反とぞ
 往く沖思案有く所變改ありと云ふは載則大に怒り
 多一と預と愼文令と何と變改あるをぞ小使も見慮
 外お万と妹のか立後とらめぞ則重思るハ父のくさるあはれ
 預陳言とらそ留りむすはし上るを命と捨りり外か
 思ひ定又は向いいらぬ武士の形とむいさる又變改も

ありとらめ一は上ハ御をめまうせらるる一林老も御供りな
 ハらと宿願の子細これる本中明神へ参終りて一と陣
 り傍に今夕露をたは若を候方る場不難り血をわや
 併くとも百日の間糸の事叶はせりたて宿願も空たり
 あり初と姫君一人の事よとてあはれわらふと
 めく備ふはあつたゆつと實りやくと云ふと載則
 うるははさぬやどはらとくくあはれはらと
 汝が男はけとてさ因早く明神へ参終りてと服
 くれが則重己が一回又くあはれとて先兩親は服
 家とあつたは因國將監が宅より息正常は射面
 一

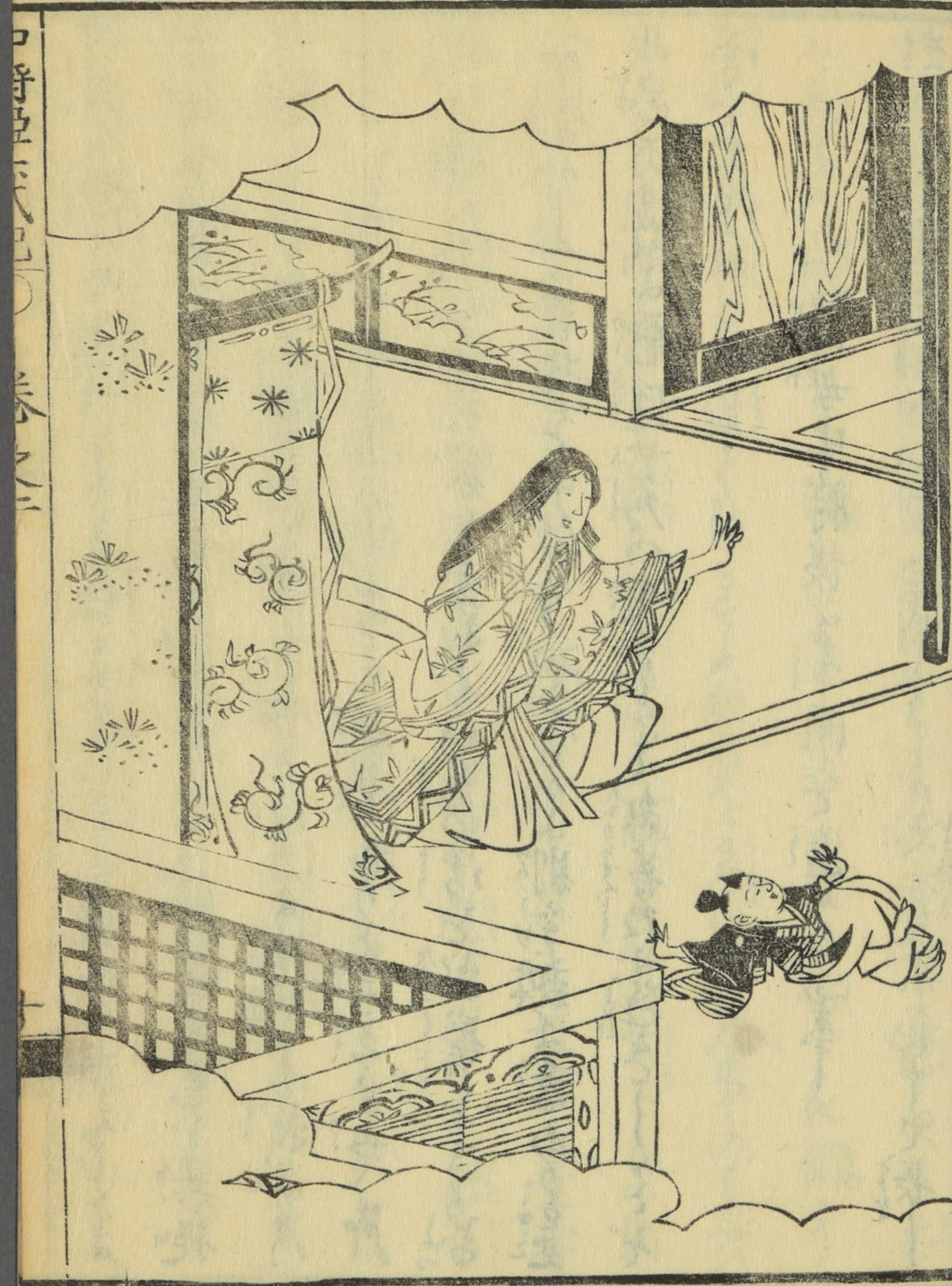
撲殺終りて有りるをさうも其時一疋あるも怪とさるる
 たり虚實を辨せんわ今宵は姫君の御殿の外津門の
 みちくちを護つて一處あるあり所自分みちくちを
 御殿の中へ入る御用をせよと云々わらわ常同命
 命頂候かたさ則重がとありてさうせよと作諾し姫
 と大切思召ての事ありて御内をさう候いさうさ
 するハ實と云々ものなりこのこを候はるいさう返答し
 くとが則重喜ひ座をさうと其日のさうと候と初夜
 成ぬとさ小次良則重ハ父載則子を見おしと云々
 面をさう津門の内をさ番一八方目と取りサもゆりせ

ざうさるんは夜中の怪しむと物言静うありは表の門を押し
 ありと云々今こそさうと云々と云々と本修の事をいさう
 張突よと云々堀をさ突進忍入と則重を助けわ若さうと
 へおらう津門の内をさ入や癖若或逃と云々と太刀を後
 るもと云々と父と追ひせん候ありかくと云々知るは載則
 赤曲の面を見おられわ後四のさあけ切く控を太
 て切くわら則重も吾親ら事ありて太刀のひさくさう
 は暫く防り敷き所のさ覺し眼くさういさうと云々と大
 候と云々とわらわと云々と候と云々と云々と云々と載則
 自らをさうと云々と御殿へおび入ると云々と云々と云々と

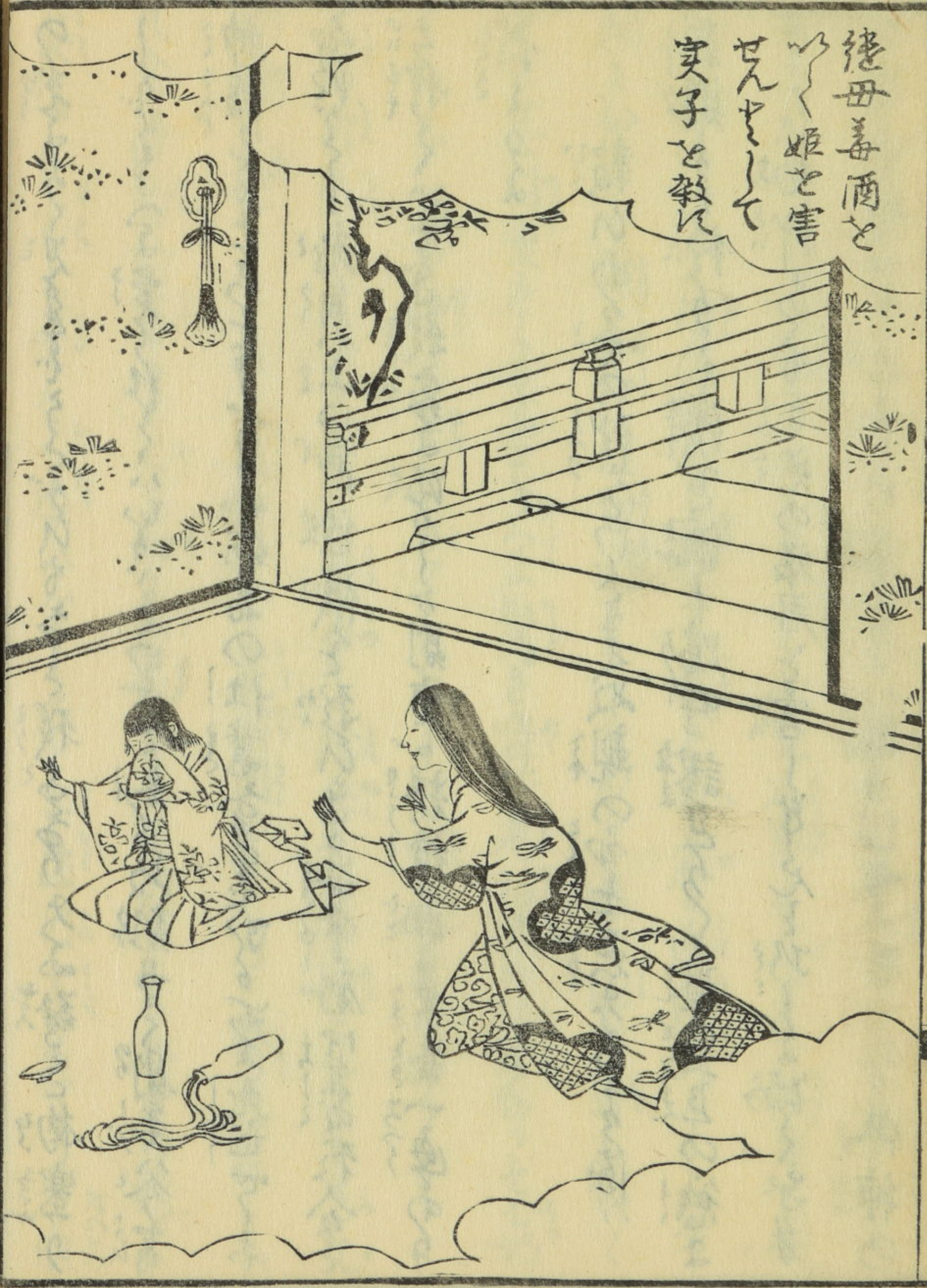
けく瀨殿の御持事ささむ番の者早くお召せし炬火の燈を
 刀といひやくまよきさ今宵ハ叶す先延引く後日とは無一と側
 ある松の枝を折ひ塚をたてておぼさ家家と逐つれさくは者
 表よあはれを誰を知らぬ切洲さすくわりのねに炬火引を結く
 見直して則重なりたすをたす驚き嗟呼は何者の仕事あるをわ
 くらひ事あり怪とさ考をたてりともさうも空をみくありさよ
 君の御考の御もあつぬと君を而も残念ありとゆくとさ思は
 載則は知てしと人と走とらるる載則園よりとらと敬は思とさ
 只今津屋の御さうくと切ハ家なり又則重を今日お往く
 衆信とささく是と人遠いなるとさ速信さすさうとらお明

のさよよくかきささうとらひもあさ我ありたふ驚と御塞り
 一どもうよさうれくハいりごとつと知らぬ御中則重公智
 神信とらとらそやせふは高の仕業ありとらあは死にや
 心はぐく怨角ハ上の津任儀を折ひさる正常御信をた人を
 さゆくいとさ我家はゆりか則重の料紙函は書一函あり
 投らうま

報いある世の理をいつとさぬ親の女を思ふるまの家
 載則よと終りく涙と流し嗚呼謬とらく現世一巨の怒よ
 まんか御あもま君の娘君と害しと攻よはく御
 よ報い我子をさふけ殺とさハ亦もは世よ有ぐら御神の



口呼五二八



徳母善酒と
 以々娘と害
 せんやとて
 実子と教へ

中將姫二行言

ナ

御悪も怖しやと且六とをど且六をかへひ多の垂おも毎をいよ
先能をくらめたりとくも申受ありたは好はよきと菩提
の縁くく佛道よりとやしく成を賜り又修り我子乃
後此を賜らんをかりの意なく病守ありと云くく御
服を彫り遂に我家と云あく心ちの傍と我髪と云りあ
家茶心して菩提をと申ひたりおんるは則親孝ありを
お忠ある故よ悪逆せたる父あを怒善なる慈と云くそ
有がされ

後母中將姫は毒酒を進めぬ事

然るは豊壽丸今幸之歳あり一が天寶榮和にて長
やうかりをて姫君の寵愛深くらるるおはるは照ねる
と家子乃成長と云ははくいよ姫君を辱ひ候と友側り
百仕する老女とお供くひとて姫君をまひもる事の思ひ
あひる或時毒酒を調え鉋子の中は隔とて茶と毒の酒
を貯て姫君のまへせむと行むひるおも姫君を豊壽
丸を慕ひ後母の居間よあしせむは遊びむやそ終り
ありと後母ハ兄弟此側もあつらうと慰よあ人あは其酒は
かへむと細子を将あり二ツのきを兄弟のあはゆよき
酒を進めむとむひがまよと月あよ人と殺と後の大
かるとが御歩躑ださら酒と云春もさるひくわうら

目もたてごとたをさるるゆきと苦をうるを遠く夜の方の茅の酒を
姫君は盛たる毒酒を豊毒丸めはたけりて飲と忽顔色を
わつもと体もだくく蒼くしてぐろんとて髪をうりめては息
絶れてさる継母は作天慈悲歎神よ佛よ祈りひめさむくを
何んぞ神佛納文のいんおろくと云もさるりたづく怒るごと
ハ悪念あり姫君ハ常は神佛と念いむが故より毒酒の難と
のうとむい継母は悪心あり我子を失うと是彌陀如来現世の
利益をありとてさるべし

継母の悪念因火とわら事

さくも光陰ハ流るごとく姫君十一歳に成りぬ又豊成卿ハ仲
麻呂奈良磨と亂をさや事速く奏せりてさるる
筑紫くた遷りひらりわくく継母ハはぬるのるは何とて姫を
失ふとのと謀ありとていまど牛をとりけりて情あり
いもまて懸る者の一念因火をぬく姫君乃寝あやうく
ゆけたり其心は毒ありてわくをの吾子やな恨
の形や吾子をゆせ房を雷の如くとらさるるをさるる
姫君一着をよとむ
おひさやあまの科が家のをぬく恨く恨く
ゆく縁にむいぐ其心は毒ありてわくをの吾子やな恨
ろく事のとてさるるるとかむ宮中是るを寛雉の遊ひある

ところからいふ豊成卿もやどなくは落ししうらうらしく思は
 やう先長谷の親考より大徳のあましく一子と依
 ぬさしそ何とて今又賽でだけ四方の氣ちあら
 らうからまゝ姫をもかゝらぬのちをさしあへんしく仲史婦
 もろを彼ちよまきありて御女をを禮并信養むむいさふ
 下向ましくうらうら彼ちの進意の侍験者も同漢とく好色の傍ら
 ぬと姫君の御容を垣内見意慕ひ礼心はくおひい深しと
 りようもかゝるあましくひまがく意とて終は處の床は
 らはしとと思ひてさるるが彼らなまき首ましくうらうらと
 腹あはれさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと
 けり

けり
 一年を還りてんやとさくを同漢よりとびましくは梅の上
 て一肩をさう

袖のこもほく甲斐ふれ意衣わけしゆいと表も一と
 かくさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと

西もさそひうらとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと
 とぬしめさうとさうとさうと二人の意傍大は怒りさ意の可さぬ
 意越さうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと
 思ひ識せんといふ日二枚いのりさうとさうとさうとさうとさうと
 ぬやさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと

死しぐらり減よ佛の加護こそありごとりたる中將姫元よ
 十四歳よたしせのいりぐ容も目を遣りてくもく貴妃
 李夫人もあつととらまはれ風信ありて遙く慶園
 又車後宮を備らるるあまのつり環の糸を伝く御月朝の倫
 旨をとりしりを姫元ありごとく頂戴しむい漢く奏しむま
 かる早陋力を一矢の矢のむしむわくそがよあまりてくもく
 侍りても妾ぐふ歳の母女を失ひ侍りてそを報恩のな續経
 念佛し深く塵縁といひ侍りて後家の侍も侍りてくもく
 慮し侍り侍りてくもく何とを侍りてくもく御宿先と蒙り
 たくなはらと勅養しむも徳乃あたまあくはりてくもく右の逐
 奏事しむもくもく帝も慮快くはに車と勅書をとりて
 仰りて侍りてくもく今般後宮辟退の儀ハ是非かりてくもく
 屬日龍田川衣衣鳴動しとくもく朝廷は穿た誼しけれそ
 帝は御座とありてくもく侍りてくもくか行りてくもく
 してを験たり汝速くは侍りてくもく御心を安しむとくもく
 今後くハ後宮奉迎の儀逃さくもくこの宣旨あり姫君は勅
 といふもくもく侍りてくもく御乳母其外お多引
 具し松田川ありてくもく見むもくもく川波流くもく侍りてくもく
 流しと蕩然たり弟君おしむもくもく侍りてくもく水神のおめありて
 吾皇の國の内かとも侍りてくもくもくもくもく

白河の御成敗

浪なみはうう結田むす乃川のもきをてて天あま乃皇の惱なごやめてよ

かかくく泳なむむひひくく川が中ちゆう又また投入いれああままららううををわわききああままららうう物もの

ややとととととと諸人しよじん奇異きいの思おもををああとと帝みかども御惱ごなご不ふかかくく御ご

快た氣きままううままををおおななのの公卿こうけい大臣だいじんととああくく姫ひめ天あまのの和詩わしのの徳とく

をを感かんしし貴かうびびままいいちちるるははおおななのの帝みかどハハ感かん感かん清せいくくはは錦にしん織おり珠たま玉たま

綾羅あや乃の賜物たまもの數かずをを知しららむむをを賜たまへへととももやや

中將姫一代記卷之二終

